

風流宗匠の絶筆もまた深い

かくの如く死せず、日また日……

「風流人ですね」と褒められたら、照れながらも内心よこぶのが人情だが、江戸時代、掛け値なしで「当今第一風流宗匠」と呼ばれたのが、田能村竹田(1777~1835)である。

竹田が生まれた豊後国直入郡竹田村(今の大分県竹田市)の岡藩初代藩主は、摂津の国茨木城主・中川清秀の次男中川秀成で、文禄3(1594)年に播磨の三木城から移り、竹田の先祖も現在の尼崎市園田の田能村から移住した。

少年時代から優秀で、22歳で藩の学校である由学館に教員として出仕し、幕府の命令で『豊後国志』の編纂に携わった。享和元(1801)年、江戸に行く途中、大坂に立ち寄り、四天王寺の五重の塔の見物を誘われたのを断り、博物学者で文人として有名な木村兼葎堂を訪問して刺激を受けた。ところが江戸からの帰路、大坂に寄ると兼葎堂は没しており、五重の塔も焼失していたという。

大坂では、浦上玉堂、岡田米山人、岡田半江、上田秋成、篠崎小竹らと知りあったほか、生玉の持明院で出会った頼山陽とは「御神酒どっくり」と呼ばれるほど仲がよく、生涯の友となった。中村真一郎の名著『頼山陽とその時代』に詳しい。温和な竹田だが、晩年には大塩平八郎との議論で熱くなることもあった。

岡藩で農民一揆がおこり、藩政改革を要求する建言書を出すのが受け入れられず、竹田は37歳で隠居する。以降、各地を遊歴し、詩をつくり、絵を描き、煎茶を楽しんだ。山水、花鳥など作品は繊細かつ色彩も鮮明で美しい詩情に溢れ、重要文化財も多い。

竹田を「当今第一風流宗匠」と評したのが、同じ豊後の儒者広瀬淡窓である(実弟の広瀬旭菴は「天下の貨七分は浪華にあり。浪華の貨七分は舟中にあり」の名言を残す)。故郷の竹田市に残る居宅の「旧竹田荘」のつくりも洒脱である。



大分県竹田市にある旧竹田荘。文人にふさわしく風雅なたたずまいである。



吹田の渡し(吹田市市長公室広報課編「きりえさん」吹田:旧街道を歩く・セピア色の写真から「吹田市より引用」)

竹田は大坂と関係が深く、風光を愛した心の故郷というべき土地が吹田である。村の代官で友人の井内左内を訪ねて「吹田村寓居図」などを描いた。写真は吹田の渡し、上高浜橋付近で、大正時代の撮影と思われるが、心躍らせて竹田が吹田へむかったときの風景が想像できる。しかし悲しいかな、竹田は吹田滞在中に発病し、岡藩の蔵屋敷(中之島の現フェスティバルホールの辺り)で没した。織田作之助の文学碑がある口縄坂を上った夕陽丘(天王寺区)の浄春寺が墓所である。

この田能村竹田をとりあげたのが、吹田市立博物館の開館25周年記念「田能村竹田展 吹田・なにわを愛した文人画家」である(4月29日~6月4日、休館日/月曜日)。大坂を愛した偉大な文人がとりあげられるのがうれしい。

私が感動するのが、病に倒れてからの絶筆ともされる漢詩「不死吟」である。

一昨不死又昨日(一昨死せず、また昨日)
昨日不死又今日(昨日死せず、また今日)
今日不死又明日(今日死せず、また明日)
若許不死日又日(かくの如く死せず、日また日)
騰々々不死 (とうとうとうとして死せず)
踏尽今年之三百六十日(踏み尽くす今年の三百六十日)
又明年之三百六十日(また明年の三百六十日)

一昨日、死ななかつたので昨日があり、昨日も死ななかつたのでまた今日がある。今日も死ななかつたので明日もある。死なずに日々が過ぎ、生命が湧き上がるように死なない。今年も三百六十日を踏みつくした。来年の三百六十日も生きていくぞ……といった感じだろう。

人生の最後の諦観なのか、生命への讃歌なのか。なんだか感動的で、とてもよい。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—」(創元社)など。